

試合2日前に旅立った吉川投手へ



亡き友に勝利ささげ

光星ナイン一丸

亡き友にささげた甲子園の1勝だった。八学光星硬式野球部の2年吉川智行投手が9日、帰らぬ人となった。昨秋に脳腫瘍が見

つかり、実家のある東京都内で闘病中だったが、光星の初戦を見届ける直前に、息を引き取った。優しくて、真面目だった仲間のためにと、チーム一丸でつかんだ勝利。仲井宗基監督も「選手の頑張りが天国に届いた」と涙を浮かべた。

(金濱千優希)

「勝たなければいけない理由がある。試合前日の10日、光星ナインの多くから聞こえてきた言葉だ。2年前、相手チームに対する大声援にのまれて逆転負けを喫したことへのリベンジ、チームと仲井監督の記念すべき「20勝」、そして吉川投手を弔うためにも、初戦の勝利が絶対に必要だった。

「優しくて、人間味がある、困っている人を助けるような人だった。7月の青森大会で投手としてベンチ入りした、同級生の後藤丈海選手は吉川投手をこう振り返った。
異変が起こったのは昨秋。吉川投手が「ボールが二重に見える」と話し、ストレッチも入らなくなっ

た。目の検査をするため、八戸市内の病院へ行ったが、脳の精密検査を進められた。

吉川智行投手への思いを胸にとどめながら、初戦を突破し、アルプススタンドの応援団の元へ駆け寄る八学光星ナイン

11日、甲子園球場